

2022. 5. 22. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書 12章 18～27 節
『生と死の隔て』

生と死の隔てにはどのような垣根が張り巡らされているのでしょうか。

キリスト教が他宗教と一線を画し、又、一般社会とも大きな隔てを持つもの一つに、この「死」に対する理解が掲げられるかと思います。なぜならば、キリスト教固有の考え方には「死」と密接に絡み合うかのように常に「復活」という思想性が伴うからです。

わたしたちが生活する社会とは極めて合理性を追求してきた社会です。それは一朝一夕に完成されたものではなく、長い歴史の末にようようにして辿り着いた試行錯誤の結果でもあります。そして今もこの社会に参加するためには幼少期から長い教育課程を経て、教養・常識・分別などを身に付けてようやく一員となることが許される社会であるわけです。

その合理性に富んだ社会は非合理的なものは一概に認められません。手で触り、目で見、耳で聞いて知り得たものだけが間違いないという社会です。しかし、こと生と死を知ることに関しましては実はこんな方法は通用しないのです。そういう知り方では人生は小間切れになってしまうのです。生と死という現実をわたしたちが人生の全容において知るには、こんな方法で知ろうとすることに挫折して、生かされているという事実が目覚めなければならないのではないかと思うのです。合理性や知性の挫折における生命そのものへの目覚め、それが復活なのです。

本日の聖書の箇所が登場するサドカイ派とはユダヤの歴史の中でも特に古く、ダビデ・ソロモン時代の祭司ツァドクに端を発します。イエスの時代も彼ら権勢は強く、上級祭司階級であり、富裕で政治力も強大でした。思想的な特徴は、モーセ五書のみを正典として信奉し、その他は預言書に至るまで全て否定していました。彼らは申命記 25 章 5 節以下のレビラト婚の話をもとに、イエスに復活の否定を迫ります。19～23 節の問いは皮肉混じりの誇張的で不真面目な問いを発するのです。

イエスは答えます。彼らと同じ土俵であるモーセ五書に踏み込んで答えられます。26節で「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」(出エジプト記3章6節)と語り、そして続けて27節で「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」と語られるのです。

この言葉を以て神は自らを啓示されたのだとイエスは言われます。そして、この言葉こそが復活の証明なのだと言われるです。

つまり、アブラハム・イサク・ヤコブという始祖はもうすでにこの世を去っているが、神が自らを啓示される時に、死者の名前を付して啓示されることは決してないということなのです。このことは彼ら始祖たちが尚、その時神のもとに生きているということの宣言なのです。

復活の信仰とは、科学的合理性や保守的宗教性に依存するものではありません。それらに挫折しつつ、自らが誰に感謝を以て依存しているのかを明確にする「生きる作業」なのです。

そして、その復活の信仰は、愛する者の死を不幸な痛ましさの中に埋め行くだけのこの世の習わしから、召された者が神のもとにあって復活の命を与えられ、また必ず会うことが出来るという希望への誘いなのです。ここにイエスの愛があるのです。